

---

# トモダチの話

藍色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トモダチの話

### 【著者名】

Z9034C

藍色

### 【あらすじ】

これはトモダチの話。トモダチの話。これは学校のある日のありふれた日常の話。恋は下心。愛は真心。傷つくことを恐れて傷ついている少年の話。

「なあ、お前好きな人いんの？」

日が沈み始めた教室の放課後。

どこかの映画のワンシーンみたいに寂れた建物の合間に染める茜色の空を、箒の柄に顎を乗せて何となしに眺めていたら、不意に背中から声がかかった。

振り向かなくてもわかっている。ここにいるのは掃除当番の僕と彰浩しかいない。

「別に」

ぞんざいに答えたらい、「まあそういうつな」とぞんざいな答えが返つて来た。ちょっとばかりむつとした。

「何だよ。じゃあ、彰浩はいるわけ？」

「いるけど？」

え、と田を丸くして彰浩の方を振り返る。掃除のやる気はないけれど帰ることもしない彰浩は、机に座つて足をプラプラしながら頬を搔いていた。照れているのかもしれないが、やり方は古いと思う。いや、別に今はそんなことはどうでもいい。

「彰浩、好きな人いたんだ。え、嘘。だ、誰？ いつから？ 僕の知っている人？」

「何だよ、急に食いついてきて」

「いや、食いつくところだろ、こりは。彰浩、そんな様子見せなかつたし」

「そりか？ まあ、そりかも」

「で、誰よ」

結局、僕も帰るのが面倒で教室に残つていただけなので、掃除など毛頭やるつもりもない。箒は適当に投げ出して、彰浩の前の席へ

と腰を下ろした。身を乗り出す。

「同じ部活の奴なんだけど、さ。まあ、ちょっと話すようになつて。趣味が合つたつーか、気が合つたていうか。女子と話していく楽しいのつて始めてかもつて思つて」

「彰浩と趣味が合つてっていうのは、珍しいね」

そういながら、僕は笑つた。笑つて、笑顔で、心の内ではつとしていた。

同じ部活か。

「泳ぎもさ、綺麗なんだよ。こー、フォームが。水しぶきなんてほんとんど立てないのに、すーって滑るみたいに泳ぐんだよ」

「ふーん、いや。別にそこはどうでもいいんだ。君の部活の話は聞いてない。で、いいから。名前を教えるよ」

もう、実際の興味の半分以上は失つていたけど、一応聞いた。彰浩はトモダチだから。トモダチだつたら、やつぱりこう反応だらうなあと思つて。

夕日に染まつたせいか、恥ずかしさのためか、僅かに頬の赤くなつた彰浩は口をモゴモゴさせたかと思うと、その思い人の名前を言つた。僕も知つている人の名前だつた。確か、隣のクラス。美人で有名だつた氣がする。気がするというのは、名前を知つているだけで顔はよく知らないからだ。

「はー、あの人か。彰浩くんもなかなか厳しい人選びますね」

「でも、彼女にしたいとか、どうとか、別に思わないって」

「好きなのに?」

「何か、よくわからないんだよな」

わからるのは彰浩だと言いたかつたが、そこは配慮しておく。代わりに田で訴えたが、彰浩は無視して座つたまま上背を伸ばした。背の高い彰浩は座高も高いようで、ちょうど顔が夕日の影になつて見えなくなる。

「男女の好きって、何が違うんだろ」

知らねえよ。こっちが聞きたい。

「さあ」

「好きなんだけどさ。何か、それは友達として好きなのか、異性として好きなのか、わからんねえんだよな。でも、女にこういう感情抱いたのは初めてだし」

「じゃあ、そうなんじゃないの」

「何だよ、素っ気ないな」

「別に。彰浩のお子ちゃん振りに呆れちゃって」

はー、とわざとらしくため息を吐く。彰浩はむつとしたようだが、無視した。こちらの空氣を読めない奴にわざわざじりじりが合わせるつもりはない。

お互にそれから黙つていると、廊下のまづから元気な足音が聞こえてきた。タツタツタツタ、とリズムよく響くその音は、この教室の前でピタリと止み、代わりに大きな音を立てて黒板側のドアが開く。

「あー、居た！ 祐くん。もう、何てことしてくれてんのさー。」

ちよづどいタイミングで、ちよづくないタイミングで、足音の主は声を張り上げた。

微妙に険悪な雰囲気へと傾きかけていた空氣は見事に吹き飛ばし、肩を怒らしながら僕のほうへと歩いてくる。僕は、降参、と両手を挙げた。

「ちょっと、何で頼んでおいたプリント先生に持つていってくれな

かつたの！

「えー、あー。言つていたね。そんなこと」

「言つていただじやないよ。私、先生に怒られちやつたじゃん」

「まあ、でも、それは亜樹の自業自得じやない。『購買に行かない  
と！ 祐君お願いねつ』とか言われてプリントを顔に叩きつけられ  
てもねえ」

「お願いしたじゃん！」

「なんてワガママ。いや、これはもしかして僕が悪いのか？」

世界の価値基準について悩んでいると、亜樹はふと視線を彰浩へ  
移した。玲コソンマ一秒で視線を百八十度ずらす。素直に凄いと思つ  
た。

「あ、ああ。彰浩君もいたんだ」

「ま、まあ」

亜樹に氣あされたように彰浩が返事をする。それだけ亜樹に鬼気  
迫るものを感じたのだろう。

それからまたしばらく教室には沈黙が舞い降りたが、何か思いつ  
いたかのように彰浩は交互に僕と亜樹の顔を見ると、それから意味  
ありげな笑顔を僕に向け、バッグを持って机を飛び降りた。

「あっ、俺そいいえばもう帰らないと。電車に遅れるわ。じゃあな、  
祐太」

「ああ、じゃあね」

それはいらぬ気遣いだと聞いたかつた。が、もう何もかも面倒だ  
った。怒鳴るのは氣力が足りない。手を掴むには勇気が足りない。  
だから手を振つて、僕は彰浩を追い出した。

彰浩はそのままそそくさと教室を飛び出していった。

窓の外の夕日は傾いて、傾いて、もう落ちそつだつた。どこに落  
ちるかは知らないけど。

風は吹いた。夏の、生温かい風だった。

「ねえ、祐君。彰浩君と何話してたの？」

「うーん? 別に」

亜樹の聞きたくないことを。

「何か、私のこと言つていた?」

「えーっと、どうだったかな。記憶力ないんだよね、僕」

彰浩の好きな人は君じゃないよ。

「何よ、イジワル」

どっちが?

「だつてねえ。彰浩に彼女ができるやんと、俺寂しいじゃん。一人身になっちゃうし。幼馴染に先を越されるのも悔しいし」

「性格わるー」

「うわ、亜樹に言われたくないなあ。それ」

笑つた。トモダチだもの。笑うよ、そりや。

亜樹も口を尖らして、笑つた。無邪気な笑顔。気付かないから、罪の意識も感じていない。無垢な笑顔だ。腹が立つほど。

そうやって、今日も僕は笑う。心が軋んでも直していく。好きの意味は違うけど、亜樹は僕を好きだと言つてくれるから。たぶんたぶん、やっていく。

でも。

でも、直した箇所は、本当に治つているの。軋んで、直して、歪んで、巻いて。

ずれた歯車はそれでも回る。キシリキシリと不愉快な軋みを立て。噛み合わない歯車は傷つきながらそれでも回る。回る、回る、

回る。

それが止まるまで、ずっと。

だから、いつか止まることを願つて。

亜樹。僕の好きの意味が変わるものまで、これ以上、苦しめないで。

「帰るか、どうせ一人身同士」

「つるさいな。ま、いいよ。仕方がない。可哀相な祐ちゃんのため  
にねー」

僕はワラッタ。

亜樹は笑つた。

太陽はもう見えない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9034c/>

---

トモダチの話

2010年10月8日15時45分発行